

ビクトリア大学で1年を過ごして

工学部電気電子システム工学科 長谷川 孝 明

95年4月より96年3月の1年間私は電気通信普及財団の援助によりカナダのビクトリア大学のVijay K. Bhargava教授のもとで在外研究を行わせていただく機会を得た。これより前、Vijay K. Bhargava教授には94年10月埼玉大学にもお来しいいただき、理工学研究科棟国際セミナー室でご講演いただいた。芭蕉の好きな親日家の教授である。

ビクトリア大学はバンクーバーを抱えるブリティッシュ・コロンビア州の州都ビクトリアにある。ビクトリアはバンクーバーの西に位置するバンクーバー島の最南端にあり、人口約30万、交通はバンクーバーから飛行機で約15分、フェリーで約1時間30分といったところである。島といっても南北に約500キロメートルにおよぶ広大な島で、島内の他の町への移動よりバンクーバーに出る方がずっと便利にできている。ビクトリアの最大の産業は観光関係で次が大学を含む州政府関係になっているようだ。5月から9月は観光シーズンで、街も華やぐ。いたるところにあるフラワースタンドには原色の花が溢れんばかりに置かれ、多数の観光客が訪れる。日本人も例外ではない。巷に日本語の表示が溢れる。州都らしい重厚さを醸し出す建物も少なくなく、これがカナダでは珍しく歴史を感じさせる街としている原因なのだろう。美しい公園や海岸線が豊富で、またほんの少し郊外に足を伸ばせば、秋には鮭の遡上する川を楽しむこともできる。川面いっぱい遡上する鮭は圧巻であった。バンクーバーへのフェリーの中からはホエールウォッチングもできた。

ビクトリア大学のキャンパスは有名なブリティッシュコロンビア州議事堂の北北東約6キロメートルの丘の上であり、15000人余りの学生が勉学に励んでいる。教育学部、理学部など8学部からなる総合大学であるが工学部は比較的歴史が浅く、12年を経過したところである。工学部の中には電気情報工学科、計算機科学科、機械工学科の3学科があるが、私は、電気情報工学科の教授でありIEEE（米電気電子学会）副会長のVijay K. Bhargava博士のもとで新しい情報通信システムの研究を行った。電気情報工学科の専任教官は教授16名、助教授5名で、講師、助手に相当する人はいない。学部学生の実験などは採点まで含めて大学院生のティーチングアシスタントに任される部分が多い。

研究室は世界中から集まった多くのマスターコース、ドクターコースの学生がおり、また、短期、長期の客員研究員、客員学生が日々研究をしている。学部学生は研究室には配属されない。マスター・ドクターの人数、設備は教官によってまったくまちまちである。競争原理に任される部分が多いという印象を受けた。また、一人の学生に対する指導教官の数は単数の場合も複数の場合もある。後者の場合主指導教官、副指導教官といった区別はなく、いわゆる日本でいう研究室という概念を持ち込めば、2つの研究室にイーブンに所属し、そのまたがった分野をその学生のフィールドとするということになる。マスターコースを1年半で通過する学生もいれば、何年もかけて通過する学生もいる。多くの学生が結婚や同棲をしているし、一度勤めてから大学に戻ってきた学生が大変多い。研究室に入ってくる学生も、一年中ぱらぱらと出てきたと思いきや、また一年中ぱらぱらと出ていく。卒業の月も特に決まっているわけではなく、仕事が終わって修士論文、博士論文があがったときが卒業のときとなる。ある非常に優秀な修士の学生に「(卒業するために)いつまでに論文書かなければいけないの?」ととんちんかんな質問をしたことがあった。「7月までに終わらせるという予定でいる。」との返事。7月になってもう一度聞くと「うーん、もう少しかかりそう。」などと言っている。結局すべて修了したのが10月だった。卒業も何月卒業などという概念はない。

当然勤めにしても何月から勤めるという概念はない。「会社に面接に行ってみたら、さ来週から来てくれと言われたので来週中に引っ越さなきゃ。」などという具合である。それで皆にさようならを言って卒業してゆく。「日本では3月に一斉に卒業し、4月1日に一斉に入社し、一堂に会して社長の訓示から始まる。」などと言ったら、同じアジアから来た学生でさえ仰天していたのが印象的だった。よくよく横並びが大好きな国民と映ったに違いない。もっとも日本でも一年中採用という会社が増えてきた。少しずつ少しずつの変化ではあるけど、いずれそれが一般化してゆくのだろう。

話を変えよう。国際会議への参加、発表も活発に行われている。95年、ウイスキーで開かれたI S I T (情報理論国際シンポジウム)では、世界各国より約600名の参加があったが、研究室総出で会議に臨み、会場関係を担当した。

世界中から有名な研究者が頻繁にビクトリア大学を訪問し、その度に大学院生向けセミナーが開かれ、講演、質疑応答が活発に行われている。もちろんいつも質問する人、いつも聞き手に回る人などさまざまであることは言うまでもない。しかし総じてよく質問は出るといえよう。

研究室にはイーサネットによりつながれた数台のワークステーションとApple TalkによりつながれたMacintoshやPCなどがあり、インターネットを通じ世界中とつながっている。私も電子情報通信学会をはじめ多くの情報を電子メールやWWW(ワールドワイドウェブ)で時間遅延なく得ることができた。自室のデスクに日本から持って行ったノート型パソコンを置き、IP接続して使った。このコンピュータから埼玉大学の私の研究室のワークステーションに毎日リモートログインを行い仕事をした。私のパーソナルコンピュータのウィンドウの一つは埼玉大学、そして二つはビクトリア大学のワークステーション、また残りのいくつかはパーソナルコンピュータ自身のアプリケーションといった使い方もしばしばした。95年夏から朝日新聞社が社説を含む多くの新聞記事や新聞記事になる以前の事項をWWWで発信したため、日本の情報もリアルタイムで伝わってくるようになった。

95年12月には本学森末前工学部長がビクトリア大学を訪問された。この時の昼食時に埼玉大学工学部とビクトリア大学工学部の学術提携などどうであろうかとの話が出た。その後これを進めるため、ビクトリア大学の工学部長と昼食がてら学術提携の話をさせていただくことになった。話をしているうちに大学間協定も決して難しくないとのことになり、工学部レベルでなく大学レベルでの協定へと話が急激に進展した。この後すぐに学長への働きかけと見通しをご連絡いただけた。ビクトリア大学は学部長、学長の権限が極めて大きく、実際の話を進めて3週間以内での学長のサイン交換まで可能にするとの話であった。こうなると急に埼玉大学の対応が間に合わなくなってくる。国際交流委員会をはじめとする幾多の会議を経てはじめて学長のサインが可能となる埼玉大学の事情を説明し、厚意で3月中に協定書にサインをしていただけるという申し出を丁重にお断りした。こちらの申し出に対し、半年以上延びることのご了解をいただかなければならなくなったことが残念であった。なおこの件はその後鈴木工学部長に引き継がれ、鈴木工学部長を中心に継続的に進められている。

強ちに学長、学部長に権限を集中させ、学長、学部長の判断でスピーディに動けるシステムと、すべてを全員の合意のもとにのみ動くことが許されるシステムの差を実感させられた出来事であった。学部長は授業を一切持たず、5年間の任期中学部長としての仕事に専念するといったトップの専門化のシステムがそのようなことを可能にするのだと思った。

さて少し図書館の話を紹介しよう。図書館は基本的に一週七日すべて開いている。午前8時から午後11時まで(月から木)。これは大変ありがたい開館時間であった。かなりの数の学生が午後11時まで真剣に勉強している。金曜は午後6時に閉まってしまうが、土曜はまた遅くまで開館し、日曜は正午からの開館となる。これはキリスト教を基本とした国だからであろう。文献検索の端末は豊富にあり、検索結果をそのままメールで自分のアカウントに落とすことができる。余談であるが、基本的に全学生、全教職員がメールのアカウントを持ち、インターネットを使っている。自宅から入る人も少なくない。私も家からPPP接続をして使っていた。日本でいう市内通話は基本料金(日本円で千円ちょっとだったと思う。)に含まれているため、各

家庭から大学のネットワークに気軽に入る人が大変多い。学内のお知らせや学部長のメッセージはもちろん、「第一駐車場の白の〇〇車のライトつけっぱなしですよ。」「落とし物みつけたよ。」「嵐が近づいているから気をつけて！」などという親切なお知らせが飛び交う。

日本人を含む世界中の多くの研究者と接するすばらしい機会を得、また勉強、研究に時間を割くことができ、私としては大変有意義な一年を過ごさせていただいたが、埼玉大学内外での多くの方々に仕事上のしわ寄せがいったことは明らかであり、これらの方々のご厚意の上に私の留学が成り立っていたことを思うにつけ、これらの方々に心より感謝するものである。微力ではあるが今後埼玉大学のために一層力を尽くしたいと思う。

